

## おわりに——「戦争と社会」に関する問いをひらくこと

野 上 元

(筑波大学)

関西学院大学先端社会研究所と戦争社会学研究会との共催で行われた書評シンポジウムから3ヶ月が過ぎた。

お読みいただけたように、そのシンポジウムを踏まえた本特集では、蘭信三の「序」に続いて、各巻それぞれに対する力の入った書評が2本ずつ計6本なされ、さらに各編者のリプライが加えられている。そうした応酬によって、本叢書の学術的な価値が確認されたはずだろう。

これだけのやりとりのあと、さらにこれを締めくくる文章を書くことの任の重さを思わずにいられない。けれどもやはり、ここに予定調和的なものを書きたくないのである。

そこでこの小文では、今回の試みを「まとめる」ことではなく、その可能性をさらに広げられるよう、問いをむしろ更に「ひらく」ことを目指したい。あらかじめ各位のご寛恕を願うのみである。

さて、改めて考えたいのは、次のことである。

暴力の多様なかたちが目に付くようになってきている現在および将来において、特にそれを国家に集中させた『戦争』とその影響について考えることにはいかなる意義があるのか？

この問いは、もちろん「2015年」という現在の状況に関わるものではあるけれども、それ以上に考えたいのは、(広い意味での)社会学の問いとしてのそれである。

本叢書では、そのスタートに「戦争が作る社会」という課題設定がなされた。それが意義深いものであったことは、先ほども述べたように、3巻からなる叢書という達成それ自体や、それをめぐってなされたこの書評特集で浮かび上がった諸論点にて示されたとおりである。

ただ、叢書に収められた諸論考において気になったのは、戦争そのものに対する分析的な配慮がなさ過ぎるのではないかということである。つまり、ひとこと言えば、「戦争が社会を作る」のと同じくらいに「社会が作る戦争」という視角があるはずではないのか、そしてそうした問いがもう少し意識されることで、再帰的に、「戦争が作る社会」という課題設定もいっそう重厚なものになったのではないかということである。

ただ「戦争が作る社会」とは、もちろんの言い方である。近現代社会において暴力の自由は国家に集約され、戦争はその発動だからだ。それだけに、国家の威信や存亡がかかる戦争は、その準備や遂行に大量の資源の集中を必要とし、社会の再編を要求する。またその大きさゆえに、その勝敗にかかわらず、戦争は社会に多大なる影響、(負の)遺産をのこす。それゆえ戦争は「社会を作る」といえるのである。

けれども、それがどのような意味で「作る」といえるのか、やはりその規準が漠然としてよくみ

えない、あるいはバラバラである。あるいはここで「社会」は何をどのような意味で指しているのか、それをもう少し検討してもよかったと思う。そうすると、問いは「国家と社会」というあたりまで行き着くのではないか。政治社会学や社会思想史研究で共有されているような古典的な論点や前提である。

20世紀前半の戦争である二つの世界大戦はまとめて「総力戦」と呼ばれ、それはまさに文字通り「戦争が社会を作る」ような戦争だったといえる。本叢書もほぼすべて、第二次世界大戦において日本が関連した戦争、アジア太平洋戦争を扱っている。ただ「2010年代」という探究の出発点を改めて確認し、あるいはここで「社会」とは何を指しているのかという問いを考慮に入れた場合に、対象となる戦争が総力戦であるという前提はどう考えられているのか。本叢書は、70年近くも前に終わった総力戦が、もはや過去のものともいえる「戦後社会」を「作った」ことを確認したものののだろうか。それでいいのか。

すでに冷戦期以降、戦争は国家や社会の「総力」を賭けて行うようなものではなくなっている。核兵器は大量に存在したが、いつしかその脅威は透明化し、消費社会がそれを覆ってゆく。あるいは、「核兵器の脅威」と「ゆたかな消費社会」とが奇妙なバランスを孕むようになる（野上2013）。徴兵制は廃止され、戦争当事国の多くの人々にとって、戦争は「動員」されるもの、「参加」するものではなく、「鑑賞」するもの、「議論」するものになった。

あるいは別の言い方をすれば、戦争はいまや大規模な公共事業の一種といえなくもない。現在では、戦争は「財政赤字」「雇用調整」「成長戦略」といった言葉たちとマッチする。つまり戦争は、重要ではあるがあくまで社会領域の一つに過ぎなくなっている。現在の戦争についても「社会を作る」というのであれば、多少の工夫が必要だろう。

それでもベトナム戦争は「社会を作った戦争」といえるかもしれない。つまり、1960年代から70年代にかけて、様々な新しい社会運動や社会改革が、戦争への異議申し立てと刺激し合いながら進められたのだ。戦争が直接「社会を作る」というよりも、戦争を媒介に「社会を作る」のための力のありかに関心されたわけである。

では湾岸戦争はどうか。冷戦が終わり、ほどなく始まった戦争である。そこで行われていたのは、戦争が（私たちのイメージする）「戦争」それ自身を演じるという戦争であった。この戦争は「社会を作った」といえるのだろうか。もう私には分からない。戦争はいまや全面化することのないよう社会の一領域に限定され、討議による民意（議会）のコントロールのもとにあるが、仮に戦争に負けても起こるのは「滅亡」あるいは「革命」ではなく「政権交代」くらいのものであろう。

やはり「社会を作る」と堂々といえるのは、20世紀前半の戦争である総力戦である。ただし、それは戦争の全ての形態の代表や平均ではなく、ある特殊な歴史的形態である。その歴史性をどう考えていけばいいのか。

それでも、（戦争でなくても）暴力や支配一般にいえるある程度普遍的なことと、戦争でなければ探究できないこと、そして特に、総力戦でなければ探究できないことを区別しつつ接続し、その歴史性を考慮しさえすれば、私たちの現代社会の多様化した暴力の問題と「戦争が社会を作る」という課題設定とを接続することができると思うのである。

逆にいえば、暴力一般に関わる問題と戦争という暴力の一形態に関わる問題との弁別が弱く、議

論の射程が測定できなかったことが読者として気になった。さらに付け加えておけば、なかには、「暴力」(の意味を相当広く取ったとしても、それ)に関連する問題を扱っている自覚すらないように見える論考もあったように思う。そして大事なのは、「戦争一般」に関わる問題とあくまでも20世紀前半的な戦争としての「総力戦」に関わる問題との弁別である。つまり、総力戦を分析的に相対化する必要である。

以上のような注文を付けるときに思うのは、かような課題設定において必要なのは、繰り返すように、戦争それ自体への探究だったのではないかということである。ところが本叢書では、あくまで戦争はアジア太平洋戦争として所与のものとされ、あるいは一つの時代的背景としてのみ扱われており、戦争自体に対する探究、あるいは暴力の発動としての総力戦の特殊性は特に配慮されてないように思われた。ここに、問いを「ひらく」可能性を求めたい。

「序」において蘭氏が紹介してくれた戦争社会学そして戦争社会学研究会の試みは、「戦争と社会」に関わる本格的な探究の必要性から生じた場である。本叢書による、これだけの達成を前にして、更にいいたいのだ。戦争は、歴史社会学・社会史的な与件としてのみ扱えるような対象ではもはや無く、我々の社会が何によって作られてきたか/いるのかをめぐって、その歴史性や比較を意識し、様々な領域・分野を関連させながら正面から論じなければならない固有の対象なのではないかということ。

#### 参考文献

- 野上元・福間良明編, 2012, 『戦争社会学ブックガイド』創元社。  
福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編, 2013, 『戦争社会学の構想』勉誠出版。  
野上元「消費社会の記述と冷戦の修辞」(福間ほか編所収)。